

古都の深層

秘められた場の歴史

高木 博志

デューク・エイセスが「京都嵐山 大覚寺 恋に疲れた 女がひとり」と歌ったのは、昭和40（1965）年。こうした嵐山や嵯峨の女性的なイメージは、実は新しい。実際、京都において女性観光客数が男性を上回るのは、1970年代である。

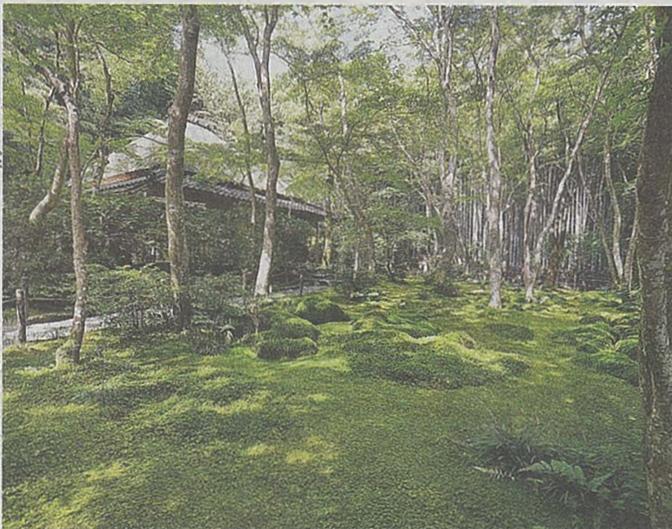
ここで奈良女子大学に膨大に残された記録から、大正8（1919）年の嵯峨への修学旅行記を紹介して、創りだされたばかりの古典の世界に触れた女学生の体験を考えたい。戦前の高等教育機関であった奈良女子高等師範学校の文科3年生21名は、同年10月26日、奈良を出発し、宇治や比叡山をめぐり、同月28日、嵐山・嵯峨を旅

した。

渡月橋から清涼寺を経て、南朝の小楠公（楠正行）の菩提を弔う宝篋院に入った。宝篋院は、京都府知事北垣国道、実業家の川崎芳太郎、画家の富岡鉄斎らの運動によって、大正5（1916）年に再興されたばかりであった。続いて紅葉の美しい藤原定家の別荘跡、厭離庵を訪ねる。この厭離庵も明治43（1910）年に復元された古典の世界で、再建に尽力した幕臣・山岡鉄舟の娘が庵主となった。

社寺再興で古典の世界視覚化

一行は、竹藪の間の坂道を通って祇王寺へと向かう。かなめ垣を過ぎ、萩の庭を踏んで、縁側から案内を請うと、老尼ができて、「どうぞ、お入り」という。女学生は、おもわず『平家物語』の「仏



平家物語の世界を感じさせる祇王寺。明治期に再興され、嵯峨のイメージ創出に一役買った（京都市右京区）

—撮影・船越正宏



祇王の歌碑

御前もこうして訪れたのではなからうか」との感想をもらした。平清盛に疎まれた白拍子の祇王・祇女や仏御前らの木像を拝し、古石塔脇の「萌え出づるも枯るるも同じ野辺の草、いづれか秋にあはではつべき」との祇王の歌に、思い

やった。

鴨東で平安神宮が創建された平安遷都千百年記念祭の明治28（1895）年に、嵯峨の有力者や大覚寺門跡らにより、北垣国道の別荘を本堂とする祇王寺再興が企てられた。京都日出新聞記者・金子静枝や鉄斎も助力し、明治35年に入仏式として実現した。明治27年には鉄斎が南朝忠臣の新田義貞公首塚碑を建てている。しかし、奈良女高師の学生にとっては、もはや古代・中世から連続と続く古典の世界であった。

嵯峨の『平家物語』や『太平記』の世界が、社寺・名所の復興という形で近代に視覚化された。その背景には、女性性につながる貴族文化や南朝を重んじる道徳が、日本のナショナルリズムを支えるものとして近代に称揚されたことがあるのではないか。

（京都大学文学部研究科所長）
■次回は11月1日に掲載します